

異文化理解が会話に現れる様子

ーロシア人留学生 Mさんと私の対話からー

山崎てるみ (rm1507@st.kobe-cnn.ac.jp)
神戸市看護大学大学院 科目等履修生

2015年11月に、我々のインタビューは行われた。インタビューの対象者は、神戸市の学園都市にあるA大学在籍の留学生たち¹である。インタビューのテーマは留学と食生活、学園都市的多様性と食生活であった。参加した数名の留学生の会話には、自国の文化や他国の文化についての理解が存在し、インタビュー全体を通して、異文化理解に関する資料を手に入れることが可能だった。特に、参加者の一人であるロシア人留学生のMさん²（以下Mさんと称する）は、自国の文化を冷静に語り、そして、他国である日本についても、つとめて知的にかつ、客観的に語っているような印象があった。

アメリカの社会学者W. G. サムナーは、文化を語る際の、異文化よりも自文化の価値を優位に考えるという特徴について、自文化中心主義（エスノセントリズム）という概念をはじめて用いた人物である。私たちは、異文化に出会った時、自文化中心の価値観で異文化を判断することがある。これは文化的ステレオタイプとして、異文化への偏見の原因ともなりうる思考パターンであり、自分たち以外の文化を優位にみようとしないくとも無意識に異文化を軽視することも含まれている点で、異文化理解において注意すべき態度や思考である。また、異文化理解に関する研究において、E. サイドは、著書である「オリエンタリズム」の中で、西洋（オクシデント）対東洋（オリエント）の関係を理解・表現する思考について次のように述べる。「現代オリエントの原住民が示す具体的行動は、いずれも一旦発露したのち、その起源としての極点に差し戻され、その過程で極点も強化される。この差し戻しこそが、まさにオリエンタリズムの規律＝訓練なのであった。」（1993：81）これは、西洋から東洋をみる視点が、西洋の研究対象としてオリエントは自ら語ることのできないものとして存在し、研究者としての西洋だけがこのオリエントを操作することができることとされ、たとえ、オリエントに関する新たな発見があったとしても、その多様性が、極点であるオリエントに差し戻されることにより、「結局、オリエントだから」という多様性を無化した理解に陥ることを示唆している。このことは、私たちの異文化理解において示唆的である。異文化についての先行した情報や知識が異文化理解を妨げる要因となりうるため、異文化の多様性が極点に戻らないよう、異文化を捉える視点をもつ重要性が示されていると考えられるからである。

2016年2月、第2回目の留学生インタビューにおいてMさんは、オリエントである日本と、オクシデント（かつオリエント？）であるロシアについて語っているのだが、その

語りは日本についての批判だけでなく、自文化も批判した語りとなっており、オリエンタリズムの変形とも言える興味深い形式をとっていた。このように、自文化中心主義的な異文化理解と、オリエンタリズムの変形とも言える特殊な形式での異文化理解において、自文化中心主義的な思考を持ちつつも、自文化批判をする困難さが現れている M さんの会話に注目し、その会話の模様について、次のような視点で分析していく。①M さんは、自文化や異文化である日本文化の現状・状況などについて、どのような語り方をするのか。②異文化理解がどのような論理のなかでどのように現れているのかを明らかにする。さらに、今回、オキシデント的であつ、オリエント的でもあるロシアを出自とする M さんの語りを、オリエント的であつ、オキシデント的でもある私が、オリエンタリズム論的観点で記述するという構成をとっているが、これは、語れるはずのないオリエントがオキシデントについて語る一つの形でもあるように思われ、その試行性には意義があると考えている。以下に、M さんの語りの特徴について 4 つの事例を紹介し考察する。

1. M さんの自文化中心主義的日本教育批判

付録資料：〈事例 1〉参照

〈事例 1〉の会話は、筆者 Y が M さんに、ロシアで学んだ日本の歴史を踏まえ、日本留学における、新しい気づきの有無について質問し、M さんが返答するというやりとりの場面である。

Y の質問に対して M さんは、日本とロシアの違いについて、ロシアの大学での授業や教科書により習得した日本の歴史と日本での日本の歴史は、直接に比較し対比的に語ることはできないが、教科書の形式の違いは事実として語る事ができると判断し発言しているようにみえた。これは、日本の歴史について、ロシアで得た日本史の知識はあるも、日本の現代史そのものについては語る事ができず自信がないため、語る事ができる形式的内容を優先して語るといったテクニカルな会話の流れづくりの方法として理解できる。すなわち、語る事の出来る内容として、教科書の叙述形式というものを選択し、内容ではなく形式についてネイティブの私たちに対して、発言していたと考えられる。ここで示した理解の一部は、その後続く M さんの次のような発言によって裏付けられる。

56 M : 「そそ(.)やっぱりなんかこの現代の日本のこと全然習ってないので普通に(.)20 世紀の 80 年代まで(.)ついたらもう(.)終わり。そ最近のこと全然(.)勉強していないので・・・やっぱりま昭和だけちょっと覚えてますけど(h)でも敗戦とか全然知らない」

そして、M さんは、日本とロシアの教科書の違いについて、日本の教科書は「ファクト」「日付」といった知識獲得を目的として作られており、日本の歴史の流れに関する内容ではなく事実のみが書かれていると次のように発言している。

52M : 「(前略) あの : : なんかすごく(.)日本ではテスト(.)ちゃんとファクトなんか(.)日付と

かなんか(.)なんかこうしてこうなった終わりみたいなこんな短い文で書いてますからロシア(.)この教科書だったらすごく長くて長くて長くて いろんな(.)なんか普通に日常の習慣とかなんか(.)自分があの(.)研究者が自分の意見をいっぱい書いてるし(.)ちょっと(.)やっぱり(.)ロシア(.)だったらテストではなくもっと自分の意見とか(.)どう思いますかとかなんか風に答えないといけないので(.)やっぱりもっと自分の感想とかいっぱい書いてます教科書の中でも : : :」

また、ロシアの教科書は項目的ではなく、歴史の背景や研究者による考察が多く書かれていると発言する。そこでは、52Mの下線部において「長くて長くて長くて」と、Mさんは意識的に同じ言葉を3回繰り返し発言していることからわかるように、日本とロシアの教科書の違いは明らかであるということを伝えようとしている。限られた情報源からではあるものの、ロシアの教育方法を調べてみると、ロシアでは日本のような○×式の筆記問題は殆どなく、筆記試験と口答試験の両建てで、口答試験においては箱の中から封筒に入った問題を選び、設問に対する回答を口述すると試験官より質問が返され、質疑応答という形で試験が行われている。そのため、初等学校より自己表現力や発表能力を高めるための教育がなされているという事実が存在している。実際にMさんが受けたロシアの教育方法との比較によって、日本のように知識獲得型的な教育方法ではなく、歴史の背景に目を向け、且つ、語りによって説明ができるといった思考能力・自己表現能力の向上に向けた教育がなされていると主張しているのだ。Mさんは、教科書の形式の違いを引き合いに出し語ることによって、日本とロシアの違いについて誠実に返答するだけでなく、日本の教育を自文化中心主義的視点で、批判的にみることができるということを私たちに伝えている。しかし、日本の教育方法をあからさまに批判し語るのではなく、文脈の中で強調されているのは、ロシアの教育の長所の方である。そして、その教科書の違いによって示された日本の教育への批判は、形式的なことであるので、私たちに向かって発言してもよいこととして、発言が適切なこととして、判断され語られている。なお、可能性としては、ロシアで受けた大学教育で使用された教科書と、日本の高校生が使用する教科書の間の差異が、両国の歴史教育の形式的差異として、ここで言及されている可能性もあるが、そのような可能性への言及がMさんからなされなかったことの意味を少し深読みすると、Mさんには、形式の差異が、教育レベルの差異に由来するものではなく、教育文化の違いに由来する者として捉えられていた、とも言えそうなのである。このように、日本において日本の歴史を学ぶことと、ロシアにおいて日本歴史を学ぶことの差が、Mさんによっては、さまざまな前提の持ち込みと様々な推論の果てに、教科書の違いを通して、文化還元主義的に表現されていたのである。

次に、Mさんが自文化批判をしながらも、一方的批判にならないようにすることで、自文化中心主義的視点を採用してしまわないよう注意して発言している場面をみていく。

2. 自文化批判とオリエンタリズム的変形を伴う語り 付録資料〈事例2〉参照

〈事例2〉の会話は、Mさんが留学によって、視野が広がり他の国を理解するために価値観を変えることができるといった発言をした後に続く語りであり、ロシア人から見たヨーロッパのステレオタイプの悪いイメージや、それに関連したロシアのヨーロッパ対抗的イメージに関わって、歴史についての説明がなされている場面である。

232 M:「(前略) **a)** んー・・・ロシア人はもうちょっと(.)ロシア以外に行く人がそんなに多くないので(.)と(.)あのテレビにすごくプロバカント[プロパガンダ、の意か]のようなニュースが多くてとか ロシアはなんかすごいヨーロッパに(.)ホモセクシャルの人しかおらんから(.)とか(.)普通になんか悪いとか(hh)ニュースしかないから。
b) ちょっといいどんなイメージがあるかな例えば(.) 19世紀のあのナポレオン戦争みたい(.)がありましたね。ヨーロッパはとなんか(.)1912年ナポレオンはちょっとロシアとなんか直接戦争が始まってなんかナポレオンがなんか普通にロシアですごい(.)まあなんだっけ(.)この(.)そそ(.)そこく戦争みたい(.)すごくなんか第1大戦争はなんかずっと大変ななんか(.)ロシアでおこなわれたから(.)すごく亡くなった人が多くて(.)すごくちょっと:」

この232Mの語りは、前後で内容が異なる形式をとっているようにみえる。**a)**において、ロシア人は他国へ旅行する人が少ないこと、そしてロシアのメディアが、ロシア政府の宣伝工作的な(プロパガンダ的な)思考を拡散していることについて、自文化批判をしている。これに対し、**b)**では、ロシアのヨーロッパに対する存在のあり方について、より慎重に言葉を選びながら発言しているようにみえる。すなわち、**a)**の発言は、ロシア人がヨーロッパ批判をすることについては、自文化中心主義視点で異国文化を捉えている証拠であるとして、(ロシア人として)自文化批判をしていることは確かである。しかし、**b)**の発言においてMさんは、「なんか」を頻回に発話し、「まあなんだっけ(.)この(.)そそ(.)そこく戦争みたい」と、「ためらい」をもちながら発言している様子がみうけられる。ここをより詳しくみてみると、「大祖国戦争」という言葉は、ロシアの抵抗と勝利を称えた呼び方であり、ロシア出身であるMさんが、この語を用いることは、自文化批判のトーンを中和する意味合いがあると言えるだろう。もちろん、Mさんと私たちとの間には、「大祖国戦争」という言葉が共有されている保障がないために、「まあなんだっけ(.)この(.)そそ(.)」という、ためらいが「そこく戦争」という言いたい事に先行して発話されている。そして、「なんか」という語は、語りのトーンが自文化批判から、自文化擁護に転移したことをマークするために用いられていると言えよう。

加えて、会話の終盤においてMさんは次のように発言する。

242 M:「あーありました。いや(.)ありました。あの一でも(.)これはほんとにちょっと(.)そ

のロシアのあの・・・なんか・・・こんなプロバカントみたいなことでしたが、(.)
そう考えている人もいました。」

このようにロシアには宣伝工作的（プロパガンダ的）で自文化中心主義的な異文化理解をする人ばかりではなく、反自文化中心主義的な思考をする人もいることがアピールされて、会話が終えられている。Mさんは、単純な自文化中心主義的語りにならないように気をつけるなかで、微妙な形のオリエンタリズム的変形を伴った自文化と異文化の語り方をしていることがわかる、といえるだろう。

次に、自国の文化についての説明は、他国よりも優先される形式をとることが明らかとなった会話をみていく。

3. 自文化に優先される発話権利

付録資料〈事例3〉参照

〈事例3〉の会話は、〈事例2〉に続く会話として、Mさんが、ソ連時代のウクライナ・ロシアの歴史を市民の視点で語っている場面である。

ウクライナの飢饉について、時代背景として何故、飢饉が起こったのかということよりも、飢饉によってウクライナ市民がどのような生活を送っていたのかについて発言がなされているが、ウクライナの飢饉は1931年と1932年に起こっており、もちろんMさんが生まれる前の出来事である。しかし、Mさんは私たちに、その出来事を経験したことであるかのように説明をするのである。

250 M:「(前略) ウクライナとパボーチェという(.)ウラルーロシアの南のほうのウラルー南ウラルーとすごいこのたいへんな状態で(.)いっぱいいっぱい人が死んでしまっ。例えば(.)普通におかあさん自分の子どもを(.)なんかうれたり(売ったり)肉(.)普通自分のこども食べたりしたとかあったし。ぼくも(たくしし?)に行ったら(.)市場に行ったらやっぱりテーブルの上に普通に死体が置いて(.)お金で買って食べるみたいな感じあったから(.)とまあ完全にちょっと(.)まあちょっと(hh)そんな(.)この国に住みたいなどと考えてる人いないですね。(後略)」

このようなウクライナの飢饉に関する知見はどのように得られたのだろうか。旧ソ連時代においては、ソ連政府は飢饉の存在を否定しつづけていたため、ロシアで情報は得られなかったはずである。旧ソ連が解体しロシアとなった今、旧ソ連時代の歴史について、ロシア国内でもウクライナの歴史に関する授業を受けることは可能になっていると推測されるが、Mさんは上述のように、あたかも見てきたかのような発言をしている。ここからは、学校や大学などの講義で得られる知見ではないものから知識を得た可能性が考えられるといえよう。例えば、ウクライナにあるハリコフ国立歴史博物館において、飢饉の様子が展示されているようであり³、Mさんの語りからは、Mさんの知識は、そのような文化や歴史

を疑似経験できるような場所において得られた知識である可能性が考えられるだろう。このように、自国であるロシアで学ぶ、(ウクライナを含んだ)ロシアの歴史は、その場所に行き、歴史を学び体験するといった、歴史と生活が密接に結びついた形の知識として獲得されるため、ウクライナの飢饉の様子をあたかも体験してきたことのように、私たちに説明することができるのである。そして、Mさんは、戦後のロシア市民の生活状況だけではなく、統計的な証拠を示し次のように語る。

244 M : 「飢饉かなんか(.)なんか(.)なんか(.)1千万人以上が死んでしまったので全国で=」

250 M : 「(前略) あの : : 村とか(.)若い男性はみんななんかちょっと死んでしまったから女しか(.)おらんからみんなちょっと大変(.)でものとかたべれなくなって()21歳から24歳までの間男性が97%が死んでしまったらしい(.)と生き残った人はすごく頭がおかしくなるみたいなんかつつと戦争で普通に戻れなくなるみたいなかんじ。(後略)」

Mさんは、ウクライナの飢餓により1千万人以上が死亡したと発言し、当時のウクライナの成人男性24~27歳のうち97%が飢餓等により死亡したことを、具体的数値を用いて示す。文献によると、スターリンの農村社会の再編成政策として、農業の全面的集団化、クラーク撲滅、穀物の強制的徴発が1929年より開始され、約400~600万人が飢餓によって死亡したとの記述がある。しかし、当時の人口統計の資料がどの程度正確に表示されているのかは不明であり、また、ロシア出身のMさんによるロシア歴史の語り以上の知識を、私たちはインタビューの場において持ち合わせておらず、調べる余地もない。そのため、Mさんからの一方通行とも言える歴史に関する説明に対して質問を投げかけても、その内容が適切なものであるのかを証明する証拠がないため、私たち聞き手は、語り手であるMさんの知識を受け入れるしかないのである。この会話において、より専門的なロシア知識を持つ者としてのMさんの発話は、聞き手の遮りによる会話の中断がなされず、発話の権利を維持したままであることが可能となっていると言える。このような一方通行とも言えるMさんの発言についてのYの返答は次のようなものであった。

251 Y : 「・・・・・・そういう話って(.)日本では歴史では習うところではないので(.)ん : :」

このような聞き手の、聞き入れる姿勢としての「沈黙」という行為が、会話の継続の判断基準となり、Mさんが広い意味での自国であるロシア・ウクライナの歴史について発言する権利が、聞き手に受容され維持されたままの形が異常なこととして捉えられないのである。自文化は、自国出身の者によって話されてしかるべき内容であり、その内容を中断

しない私たちは、Mさんの語るロシアの歴史を「やっぱりネガティブなロシアの歴史」として違和感なく受け入れているのである。この一方的とも言えるMさんの語りを特徴づけているものは、Mさんの誠実な返答を、オリエンタリズム的視点で捉え、無意識のうちにロシア文化を更に低くみてしまっているのである。しかし、Yの返答に対してMさんは次のように答える。

252 M：「ん：：(.)なんか(.)日本では(.)普通に前にちょっと(.)普通に日本帝国の(.)日本のちょっとあの(.)悪い(.)時代だったから(.)なんかちょっと(.)勉強して(.)ないらしい(.)みたいです。ちょっとわからないですけど(.)んー(.)1910年から1945年まで日本ちょっと(.)あれ(.)ちょっと(.)日本悪かったからちょっと(.)大学とか(.)がっことかで(.)勉強してなかったのかもしれない(hh)」

YとMさんとの会話において、Mさんは、ウクライナ飢饉の説明の中で自文化批判をしながらも、Yがウクライナの歴史について無知であったことについて、日本の帝国主義時代の偏った教育が原因であるとして日本の教育体制を批判している。ここには、日本の教育は施策によって妨げられた部分があり、知識が浅いことは責められないことである、といった、異文化の歴史を考慮しながら語るMさんがいる。とはいえ、この配慮の前提は、「ちょっとわからないですけど」という発言にあるように証明できないことであり事実であるという確証を要求するわけでもない。現在、日本は民主主義の政治体制をとっており、日本帝国主義時代の教育制度が現在も継続されているわけではないが、そのように現在の日本の状態については、あまり否定的に述べないようにしながら、Yの知識のなさについては、責任を免除する語りを組み立てているのである。

このように、Mさんが異文化について語る場合、ロシアと日本の現状の差ではなく、ロシアの現状と日本の過去の状況というタイムログを伴う語りによって、語りの平穏さを確保しながら、必要な主張はしていく、というスタイルが成立していたのである。

次に、自文化中心主義的視点によって他国との比較をするMさんの会話場面をみていく。

4. 自文化中心主義的視点とオリエンタリズム変形的異文化理解

付録資料〈事例4〉参照

〈事例4〉は、ロシアの将来についてMさんが語っている場面である。

この会話において、Mさんは、「腐敗」について様々な言い換えをすることにより私たちに理解できるように次のように語る。

116 M：まあ(.)なん(.)ロシア人はなんのために生きてるとか(.)これは(.)すごく問題 (中略)
なんかロシアはアイディアがないからみんなちょっと(.)自分別々で自分のために
生きているみたいな感じで(.)それであんまりロシアはちょっと発展できないと

かいろいろちょっと(.)すごくあの一え一(.)腐敗?レベルが高いから(.)腐敗ですね
このコラプションちょっと(.)んーわいろとか(.)すごく高いからいま (中略) ロシア
はこの(.)腐敗? レベルで世界で 112 くらい(.)これはあの(.)アンゴラとか(.)中央ア
フリカとか南アフリカのレベルなので(.)で全然だめ(hh)ロシアは自分は世界のリ
ーダーとかなんか(.)世界のリーダーとかにしたいですけどやっぱりちょっと・・・今
アンゴラのレベル＝

117 Y : = 発展レベルが?

118 M : ん? ん? 発展レベルじゃなくて(.)ん? 腐敗

M さんは会話の中で、「腐敗ですね」、「コラプション」、「わいろ」と、言葉を言い換えて説明する。116M の下線部の質問に対する返答がないために言い変えていると考えられる。そして、117Y の発言により、通じていなかったことが明らかとなっている。この会話は、M さんの質問に対して Y が返答するという、「質問」と「返答」という基本的な会話分析の形が現わされているのだが、ここで気になる M さんの発言は、何度も言葉を言い換えるといった、私たちに丁寧とも言える説明によって理解促進に向けた働きかけがなされていることである。腐敗認識指数(CPI)⁴が高くない日本人にとっては、聞きなれない言葉であると考えられる。そのため、私たちの理解に合わせて M さんは様々な言い方で伝えたい内容を説明し理解を求めていたのである。M さんは、会話の中で、私たちの反応を確かめ、その反応を、会話を継続するための判断基準にしていたと考えられる。また、違う視点からこの会話をみると、ロシアは世界のリーダーとなり牽引したいが、他国との関係性や経済的な問題を抱え、汚職率が高く、現実にはアンゴラと同じレベルであると、ロシアを起点として表現されている。紛争が続いている国や、ガバナンスや司法が機能していない地域において、腐敗認識指数がワーストとなっており、最下位(163 位)であるアンゴラは、貧困問題や子どもの死亡率が高いといった状況におかれている国である。そのような状況にある国と自国を比較し M さんは、次のように語る。

130 M : 「ん(.)ん(.)レベルがいまちょっと(.)なんかアフリカとか一緒にレベルです(.)それはすごくあの(.)問題なんか・・・なんか(.)ことわざがありますロシアには問題が二つある(.)一つ目は馬鹿と(.)二つ目は(.)悪い(.)道(hh)なんか(.)道路なんか(.)ロシアはすごく道がぼこぼこだから(.)やっぱりなんかみんなちょっと馬鹿が多くてみんな議会で働いてるみたいなかんじでおもわれてるから hh(.)やっぱりちょっとロシ・・・ま日本とかも(.)他も問題がありますけど(.)あの普通になんかロシアに政治家とか(.)なんか議会に入ろうかとおもったら(.)彼(.)彼の目的はだいたいロシアもっと良い国にしたいというアイデアじゃなく(.)なんか議会に入ったらすごくあの一(.)権力とか力持ちになるから(.)自分お金持ちになるみたいな感じですから」

自国であるロシアは世界の中で汚職率が高い国であることは事実であり、その事実は、その後の語りによって裏付けされている。それは、ロシア国内で言われている問題を例に挙げ「馬鹿」と「道」と示し、そのうちの「馬鹿」は議会で働く人として提示し、ロシアにとって重大な問題であることを示している。しかし、Mさんは、腐敗認識指数が高い、アンゴラや中央アフリカ、南アフリカのレベルを「だめ」という批判の言葉に更に「全然」という存在否定の言葉が付帯した形で表現する。Mさんのこの発言によって、私たちは、ロシアがアフリカと同等の立場にあることを認めたくないが、それぐらいロシアは悪いのだと思っているのだと受けとる。また、会話の冒頭において、Mさんは、「アイディア」[外来語のアイディア/イディア，理想・理念，の意か]という言葉を使い繰り返して発話している。このアイディアはロシアのリーダーが国を牽引する理念がないために国民は路頭に迷っているのだといった意味合いで自文化批判する言葉として使われている。しかし、発話の中盤には、アフリカだけではなく日本も比較対象として発言されている場面がある。汚職はロシアに限らず、アフリカという開発途上の国だけでなく、先進国である日本においても行われていることだとする発言であると考えられる。そのため、ロシアは問題をもつ立場にいるが、世界中の国と比較することにより、ロシアの問題は世界の問題へとシフトし捉えられることになるのではないだろうか。日本人だけでなく、他の地域や国においても異常とされる行動がなされている。しかし、その行動について批判されているが、見て見ぬふりをするなど、異常な行動を見ないようにしている現実として捉えている可能性がある。このように、自文化批判をしながらも、自文化中心主義的な視点で他国を捉えないように慎重に発言し、且つ、自国以外を対象に比較することにより、自国の価値を維持した状態で他国を低く価値づけることができる。このように、オリエンタリズム的変形を伴った異文化理解の視点と、自文化中心主義的な異文化理解の視点とが近接した形で発言されていたのである。

これまで、Mさんのインタビューから、異文化理解への志向性が現れた特徴的な会話の事例に沿って、自文化中心主義的な異文化理解と、オリエンタリズム的変形における異文化理解の関係について考察してきた。ロシアにおいて日本語を専攻し、現在も現代日本史について学ぶMさんの知的で誠実な語りは、私たちに対してロシアやロシア以外の国について、自文化中心主義的視点で語りながらも、自文化批判をする語りといったオリエンタリズム的変形による異文化理解のもと、会話がなされていたのである。Mさんは、完全に自国批判をすることはせず、しかも、単独で他国批判をおこなわない語りをしていた。この2つの異文化理解の思考パターンは、一見敵対しているように見えながらも、お互いが近接し支え合って存在していることが明らかとなったのである(図1)。私たちは、異文化を無意識に自分の価値観で判断し、位置づけることに注意し異文化に接触したり、他国の人に出会ったりする。しかし、その行為は、裏を返すと、オリエンタリズム的変形の視点で他国をみているようで、実は、他国からみた自国の自文化主義的な文化の現状や状況を

無意識のうちに無かったことにし、事実から目を背け、自国や自文化を自分の良いように解釈し、理解しているのではないのだろうか。それは、他国との比較によって自国を直視せず、ゆがめて見てしまうといった異文化理解への志向性として、その異常さがその国らしさを伴って捉えられてしまう可能性があることを示唆しているのではないだろうか。

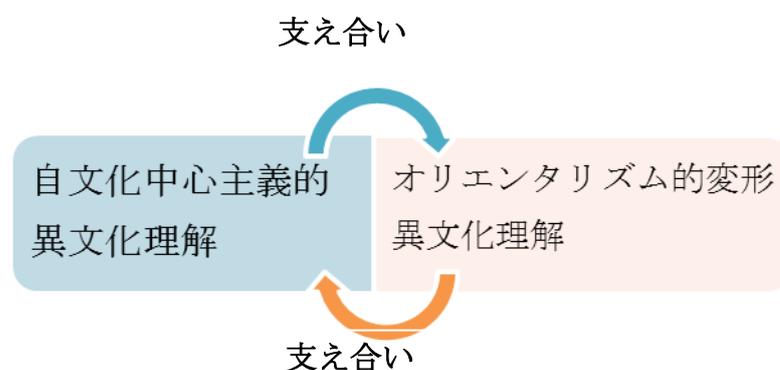


図 1.

自文化中心主義的異文化理解とオリエンタリズム的変形をした異文化理解の関係

〔注〕

1. 2008 年から 2020 年を目標に「留学生 30 万人計画」を掲げている日本にとっては、異文化理解について省察し考える時期としては遅いかもしれないが、留学生を受け入れる日本人の異文化理解は継続して考えなければならない重要な課題である。

2. M さんの社会背景について説明をしておく。M さんは、ロシアの某大学にて国際関係学部東洋学科を卒業し、外国人研究生として日本に留学している。留学の目的は、日本語や日本の歴史、特に現代歴史を学ぶことである。また、M さんは、日本語を専攻していたため、会話においてさほど不自由はなく日本語の理解能力は高い方である。

3. ウクライナにあるハリコフ国立歴史博物館のホームページ内には飢餓についての展示紹介の掲載はない。しかし、ウクライナ旅行者のブログに詳しくはないが、歴史博物館において飢餓についての展示物があることが書かれている。(ムルマンスク便り 2009 年 7 月 26 日更新：<http://blog.goo.ne.jp/murmansk/e/167fd54fb8f3fe945720b3b5615176e6>)

他に、ウクライナの飢餓の状況については、ロバート・コンクレスト著/白石治郎訳、(2007)の「悲しみの収穫 ウクライナの大飢饉—スターリンの農業集団化と飢饉テロ」に飢饉の惨状が書かれている。

4. 腐敗認識指数(CPI)は、トランスペアレンシー・インタナショナル(TI)が、汚職・腐敗の防止を促す目的に 1995 年以来毎年、調査・公表している世界 175 国と地域を対象にしたランキングである。2016 年 1 月 27 日の発表では日本は 18 位。インターネット上にデータ配信されている。(GLOBAL NOTE 2016 年 1 月 27 日更新

<http://www.globalnote.jp/post-3913.html>)

参考文献 (50 音順)

- Africa Quesut.com, 2016 年 1 月 28 日, 「アフリカで汚職が深刻な国は? 腐敗認識指数が示す 60 億人が晒されている現状とは」, (閲覧日 2016 年 2 月 13 日, <http://afri-quest.com/>).
- 伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編, 1998, 『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社.
- 太田隆文, 2015, 「内なるグローバル化 海外からの留学生受け入れの現状と課題」, 日本貿易会 月報, (閲覧日 2016 年 2 月 13 日
http://www.jftc.or.jp/shoshaeye/pdf/201506/201506_08.pdf).
- 外務省, 2015, 「人の交流 留学生交流 留学生 30 万人計画」, 外務省ホームページ, (閲覧日 2016 年 2 月 13 日, <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/hito/ryu/>).
- Garfinkel, H. Studies of the routine grounds of everyday activities, *Social Problems*, Vol. 11, No. 3, 225-250.
- 梶田美雄, 1995, 『デイケアの社会学—K 市中間施設における観察記録から』, 臨床心理学研究 33(1), 日本臨床心理学会.
- 串田秀也, 2009, 『特集 聞き手行動から見たコミュニケーション 聞き手による語りの進行促進 継続支持・継続促進・継続試行』, 認知科学 16(1), 12-23.
- Goffman, Erving 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*, Anchor Books, Doubleday and Company Inc, New York.
(=2002 浅野敏夫訳, 『儀礼としての相互行為 対面行動の社会学』法政大学出版局.)
- Said, Edward W. 1978, *Orientalism*, Georges Borchardt Inc. New York.
(=1993, 板垣雄三, 杉田英明監修, 今沢紀子訳『オリエンタリズム上・下』平凡社.)
- Psathas, George 1988, *Ethnomethodology as a new development in the social sciences*, Lecture presented to the Faculty of Waseda University, Tokyo.
- Sacks, Harvey *An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology*, David Sudnow(ed), 1972, *Studies in Social Interaction*, The Free Press, 31-73.
- 桜井厚, 2007, 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Sumner, W. G, 1907, *Folkways, A Study of the Social Importance of Usages, manners, Customs, Mores and Morals*, New York, Ginn and Company.
(=1975, 青柳清孝・園田恭一・山本英治ら訳, 現代社会学大系第 3 巻『フォークウェイズ』, 青木書店.)
- Schglöff, Emmanuel A. and Harvey Sacks, Opening up closings, *Semiotica*, Vol. 7, 289-327. (=1995, 北澤裕・西阪仰, 『日常性の解剖学 知と会話』マルジュ社.)
- 田中陽児・倉持俊一・和田春樹, 1994, 『世界歴史大系 ロシア史 2 18~19 世紀』山川出版社.
- 田中陽児・倉持俊一・和田春樹, 1994, 『世界歴史大系 ロシア史 3 20 世紀』山川出版社.

- 津田憂子, 2009, 『外国の立法 ロシア 教育制度改革 』, 国立国会図書館調査及び立法
 考 査 局 . (閲 覧 日 2016 年 2 月 13 日
<http://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/legis/23902/02390208.pdf>.)
- 東郷正延・染谷茂・磯谷孝・石山正三編, 1988, 『露和辞典』, 研究社.
- 能智正博, 2011, 『臨床心理学を学ぶ⑥ 質的研究法』, 東京大学出版.
- 藤沼貴編, 2011, 『和露辞典』, 研究社.
- Pomerantz, A., 1984, “Agreeing and Disagreeing with Assessments: some Features of
 Preferred/Dispreferred turn Shapes”, J. M. Atkinson and J. Heritage eds..*Structures
 of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge
 University Press, 57-101.
- 山崎敬一, 1983, 『社会行為論とエスノメソドロジー 社会的行為における規則とレリバン
 ス』 ソシオロギス 7, 88-105.
- 山崎敬一, 江原由美子, 1984, 『沈黙と行為 規範と慣行的行為』 ソシオロギス 17.
- 好井裕明, 1992, 『エスノメソドロジーの現実 せめぎあう〈生〉と〈常〉』世界思想社.
- 和田春樹編, 2002, 『新版 世界各国史 22 ロシア史』山川出版社.

謝辞

本稿は、神戸市看護大学大学院で科目等履修をした「フィールドワーク論」の成果物として作成したものです。本稿の執筆にあたっては、神戸市看護大学の榎田美雄先生より、執筆を諦めかけていた時も、貴重なご指導ご鞭撻いただいたことを、また、M さんにはインタビューを快く引き受け、協力してくださいましたことを心より感謝申し上げます。

付録資料

【事例 1】

51 Y : 日本語で(hhh)・・・ロシアで学んだころのその日本の文化や歴史を学んでこっちに来て(.)実際どうでした(.)なんかこう違うとか(.)そうだな～とか

52 M : なんか(.)こう(.)まあだいがくてこんな(.)日本についたら普通にやっぱり日常のところがなんかいっぱいふえてましたけど違う。日常習慣とか全然違いますからロシア人と日本人は(.)でも大学で習うのは(.)ま・・・ま教科書に書いてあることなので別に(hh)なんか別に毎日こんななんか会わないですね(hh)こんななんか(.)あの一別に日本の(.)文化(.)あ(.)んー(.)なんか一番びっくりしてたのはやっぱりこの(.)この大和時代からこの江戸時代までの日本(.)日本史ならってたから。ま(hh)いまの日本とはあまりかか関係ないのであんまりそんな(.)普通にちょっと(.)えーなんだろ(.)ロシア語の教科書見た後に日本語の(.)このこくしの教科書みたら普通にちょっと書いてあることところは違ってますけど(.)なんか(.)何が一番(hh)というかわからんけど(.)なんかやっぱりロシアはちょっと長いかな(.)ぼくは一冊もってますけどこのこくしのなんか高校生のためのなんか日本史みたいな教科書があって普通に(.)あ: : なんかすごく(.)日本ではテスト(.)ちゃんとファクトなんか(.)日付とかなんか(.)なんかこうしてこうなった終わりみたいなこんな短い文で書いてますからロシア(.)この教科書だったらすごく長くて長くて長くて いろんな(.)なんか普通に日常の習慣とかなんか(.)自分があ(.)研究者が自分の意見をいっぱい書いてるし(.)ちょっと(.)やっぱり(.)ロシア(.)だったらテストではなくもっと自分の意見とか(.)どう思いますかとかこんな風に答えないといけないので(.)やっぱりもっと自分の感想とかいっぱい書いてます教科書の中でも : : :

53 Y : んー : : テストのやりかたが違うんですね : :

54 M : ん(.)と(.)ま(.)ただ大学で習ったのはただ(.)教科書のもので(.)なんか日本に着いたら(.)びっくりしたところは(.)ないですね。

55 Y : そうですよ(hh)大和から明治ですもんね。

56 M : そそ(.)やっぱりなんかこの現代の日本のこと全然習ってないので普通に(.)20 世紀の 80 年代まで(.)ついたらもう(.)終わり。そ最近のこと全然(.)勉強していないので・・・やっぱりま昭和だけちょっと覚えてますけど(h)でも敗戦とか全然知らない

【事例 2】

232 M : (前略) んー・・・ロシア人はもうちょっと(.)ロシア以外に行く人がそんなに多くないので(.)と(.)あのテレビにすごくプロバカントのようなニュースが多くてとかロシアはなんかすごいヨーロッパに(.)ホモセクシャルの人しかおらんから(.)とか(.)

普通になんか悪いとか(hh)ニュースしかないから。ちょっといいどんなイメージがあるかな例えば(.) 19 世紀のあのナポレオン戦争みたい(.)がありましたね。ヨーロッパはとなんか(.)1912 年ナポレオンはちょっとロシアとなんか直接戦争が始まってなんかナポレオンがなんか普通にロシアですごい(.)まあなんだっけ(.)この(.)そそ(.)そこく戦争みたい(.)すごくなんか第 1 大戦争はなんかずっと大変ななんか(.)ロシアでおこなわれたから(.)すごく亡くなった人が多くて(.)すごくちょっと：：

233 K：日本語の訳だと大祖国戦争と言うんですけど(.)ロシア語では知らないです。

234 M：そうそう！大祖国戦争です！なんかなんか(.)この全民でこの戦争にいるみたいな戦争(.)と(.)第 1 大戦争はロシアに対して 2 番目で(.)1 番目はこのナポレオンの戦争でこのときモスクワは(.)あの全部あの(.)火事でなんか全部つぶされて(.)ちょっとすごく(.)あの変な戦争でしたが(.)やっぱり勝ってと(.)フランスのパリまで軍隊が行って(.)なんか勝ちました。でもそのとき軍隊で働いていたのはだいたい貴族の人が多くて(.)貴族だからすごく良い影響とかもらえてる。そんなときヨーロッパには行ってないです。あのちょっと遠いし鉄道とかないから(.)でもなんか初めて貴族の人とか軍隊の人とか初めて行って(.)ヨーロッパと比較してみました。やっぱりロシアはなんか生活のレベルが違っているとわかって(.)この戦争のあとすごくロシアにあの(.)んー(.)運動が始まりました。始まったちょっとこのあの(.)帝国(.)あの帝国の制度をつぶして(.)あのヨーロッパのようなちょっとあの(.)もっと(.)あのデモクラ(hh)デモクラシー(.)デモクラシーに(.)しようとおもってあの 1825 年にあの 12 月のあの・・・んーデ

235 K：デカ・・・

236 M：あーあー 聞いたことある？デカプリスト

237 K：デカプリスト

238 M：そうそうそう((K の方を向き乗り出すような姿勢でやや声が大きくなる))あーそうです！ すごいですね。たとえばプーシキンもこのデカプリストほうを応援してました。とみんな(.)このそのときロシアの(.)あの一番インテリゲンツァとか(.)一番やっぱりあの(.)インテリゲンツの人は参加してて(.)なんかちょっと(.)ますごいなんかこの運動のものはやっぱりヨーロッパにいったからロシアももっと良い国になんかしたいとおもって・・・と・・・この(.)例えばソ連の時代もこの第二大戦争が終わってみんな(.)ベルリンまでいったから(.)ちょっとまたヨーロッパみて(.)ほんまにちょっとソ連が負けてるなとわかって(.)そんなときからもけっこう(.)あのソ連反対の運動けっこうまたふかつしました・・・

239 K：そうだったんですか？いや 1945 年は(.)あのー自分たちが勝ったから(.)そういう運動は

240 M：【あーありま

241 K：【起きないのかと思ってました。

242 M : あーありました。いや(.)ありました。あの一でも(.)これはほんとにちょっと(.)そのロシアのあの・・・なんか・・・こんなプロバカントみたいなこといきましたけど(.)そう考えている人もいました。(後略)

【事例 3】

242 M : (前略) ちょっとそんときのドイツのなんかロシアの(.)戦争のロシアは(.)あの戦争の(.)前の経済はすごく悪くて例えば 30 年代に(.)全国ですごいあれ(.)んー(.)なんか食べ物がない(.)時代がすごく : :

243 K : 飢饉

244 M : 飢饉かなんか(.)なんか(.)なんか(.)1 千万人以上が死んでしまったので全国で=

245 K : =ウクライナで

246 M : そそそそそ

247 K : 死んでるわけですよ？その(.)農地改革をするといつて : :

248 M : うんうんうんうん

249 K : ま(.)食料を調達しちゃうから(.)だからウクライナの人は餓死するわけですよ？

250 M : そそそ(.)そそそ(.)そうですね。ありました。すごいですがですね！なんかロシアなんか全然専門じゃないですけど(.)知ってます。とにかくウクライナがなんか一番厳しくて(.)ウクライナとパポーチェという(.)ウラルーロシアの南のほうのウラルー南ウラルーとすごいこのたいへんな状態で(.)いっぱいいっぱい人が死んでしまっ。例えば(.)普通におかあさん自分の子どもを(.)なんかうれたり肉(.)普通自分のこども食べたりしたとかあったし。ぼくも(たくしし?)に行ったら(.)市場に行ったらやっぱりテーブルの上に普通に死体が置いといて(.)お金で買って食べるみたいな感じあったから(.)とまあ完全にちょっと(.)まあちょっと(hh)そんな(.)この国に住みたいなんて考えてる人いないですね。ちょっと直接戦争の前にちょっと(.)なんか(.)戦争がはじまるからちょっと経済がかいたつしたんですけど戦争が終わってもちちょっと(.)全然(.)やっぱり勝ったから誇りが高くなりますけど。でも日常で(.)もなんかなにもないから料理もないし(.)戦争がおわったから全部つぶされてるから仕事もないし。あの : : 村とか(.)若い男性はみんななんかちょっと死んでしまったから女しか(.)おらんからみんなちょっと大変(.)でものとかたべれなくなって()21 歳から 24 歳までの間男性が 97%が死んでしまったらしい(.)と生き残った人はすごく頭がおかしくなるみたいななんかずっと戦争で普通に戻れなくなるみたいなかんじ。でもちちょっと(.)その時でも ロシア(.)ソ連は人間のためのインフラとかなかって(.)でもドイツは冷蔵庫(.)とかありますし(.)普通に広くて(.)電気(.)ものとかもあるからちちょっと(.)あ : : (.)まあ普通にロシ(.)ロシアに戻らずヨーロ(.)ヨーロッパになんか(.)生き残った(.)ヨーロッパに残った人が結構多かったらしい。少し疑われたら(.)裏切り者か

など思われたらすぐに死刑されるから。みんなちょっとロシアに帰るのこわいから
 (.)ヨーロッパにいるし(.)もしなんかちょっと(.)家族はみんな死んでしまう(.)だとわ
 かるから(.)イタリアにいるからイタリアにいようかなと思う人が多かつ
 た.....

251 Y :そういう話って(.)日本では歴史では習うところではないので
 (.)ん :

252 M : ん : (.)なんか(.)日本では(.)普通に前にちょっと(.)普通に日本帝国の(.)日本のちょ
 っとあの(.)悪い(.)時代だったから(.)なんかちょっと(.)勉強して(.)ないらしい(.)みた
 いです。ちょっとわからないですけど(.)んー(.)1910年から1945年まで日本ちょ
 っと(.)あれ(.)ちょっと(.)日本悪かったからちょっと(.)大学とか(.)がっことかで(.)勉強
 してなかったのかもしれない(hh)

【事例4】

116 M : まあ(.)なん(.)ロシア人はなんのために生きてるとか(.)これは(.)すごく問題(.)やっぱ
 りあのソ連が(.)無くなったからちょっと10年間くらいすごくバラバラだったから
 (.)全然あの一かくていしてないみたい(.)ちょっとアイディアみたいになりますけ
 ど(.)なんかロシアはアイディアがないからみんなちょっと(.)自分別々で自分のた
 めに生きているみたいなかんじで(.)それであんまりロシアはちょっと発展できな
 いとかいろいろちょっと(.)すごくあの一えー(.)腐敗? レベルが高いから(.)腐敗で
 すねこのコラプション(汚職・買収)ちょっと(.)んーわいろとか(.)すごく高いから
 いま(.)ちょうど(.)ちょうど2週間くらい新しいあの一検査の結果が出て(.)ロシアは
 この(.)腐敗? レベルで世界で112くらい(.)これはあの(.)アンゴラとか(.)中央アフ
 リカとか南アフリカのレベルなので(.)で全然だめ(hh)ロシアは自分は世界のリー
 ダーとかなんか(.)世界のリーダーとかにしたいですけどやっぱりちょっと・・今ア
 ンゴラのレベル=

117 Y : =発展レベルが?

118 M : ん? ん? 発展レベルじゃなくて(.)ん? 腐敗

119 Y : 発展レベルじゃなくて(.)あー腐敗 : :

120 K : 汚職。

121 M : 汚職かな(.)あの : :

122 K : 腐敗(.)賄賂。

123 M : そそそ賄賂。あの賄賂とか(.)そうですね例えば(.)こんなようなビルとかけんちくし
 (.)建築予定があって(.)ま(.)はいぼく(.)なんか建てますっていったら会社とかで

124 Y : もう決まっている?

125 M : そうもう決まってる(.)ぼくビル建てるようになったのは(.)この(.)けんちょうに友達

がいるからそっからぼくにビルの

126 Y : わかりました(.)談合のようなことですね？

127 K : 談合というか予定価格漏らしとか

128 M : んんん(.)そう(.)すごくあの汚職そうそう合ってます。

129 K : コラプション

130 M : ん(.)ん(.)レベルがいまちょっと(.)なんかアフリカとか一緒にのレベルです(.)それはすごくあの(.)問題なんか・・なんか(.)ことわざがありますロシアには問題が二つある(.)一つ目は馬鹿と(.)二つ目は(.)悪い(.)道(hh)なんか(.)道路なんか(.)ロシアはすごく道がぼこぼこだから(.)やっぱりなんかみんなちょっと馬鹿が多くてみんな議会で働いてるみたいなかんじでおもわれてるから hh(.)やっぱりちょっとロシ・・ま日本とかも(.)他も問題がありますけど(.)あの普通になんかロシアに政治家とか(.)なんか議会に入ろうかとおもったら(.)彼(.)彼の目的はだいたいロシアもっと良い国にしたいというアイデアじゃなく(.)なんか議会に入ったらすごくあの一(.)権力とか力持ちになるから(.)自分お金持ちになるみたいな感じですから(.)ちょっとそのせいで今(.)だいたいなんか(.)このロシアの ロシアのなんか道を決める人は自分の【こと

131 Y : 【こと

132 M : 自分のこと(.)しか考えていないからあまり(.)ロシアは大きい建設があればなんか(.)すごい橋とか作る時(.)あの(.)めっちゃすごいなんかあの(.)いまとうきょうにある(.)東京オリンピックがある東京にある(.)建てますね(.)スタジアム？

133 Y : 【国立競技場

134 K : 【国立競技場

135 M : そうそうそうそうこんなすごくニュースにいっぱいでてますね？ こんなすごい高くなったら反対(.)なんか活動(.)とかいっぱいありますけど。例えばロシアにあの(.)サンテペテロブルグという街に(.)あの一サッカーチームのスタジアムがなんか(.)スタジアムが建てられているがもう 8 年間くらい 10 年間くらいとかつづいてて(.)なんかスタートからいままで 10 倍くらい高くなっても(hh)まだなんか終わってない。それでも(.)みんなあれ(.)ちょっといま世界でなんか一番高いなんかスタジアムになりそうなくらいなんか(.)別にみんなやっぱり : :

【編集後記】

『現象と秩序』第4号をお届けします。今回は、本誌初の小特集「専門職教育における社会学」が5本の論考によって構成されています。この小特集は、昨年9月の日本社会学学会大会のテーマセッションをベースにしたものです。論争的な側面を持った論文が掲載されていると理解しております。ご意見をいただければ、幸いです。その際には、下の編集室メールアドレスの方まで、お寄せください。

次号は、2016年10月発行となります。特集の予定はありませんが、今回掲載した池谷のぞみ氏の神戸での講演を受けた、ご自身の調査に関する論考を、谷川千佳子氏（神戸市看護大学）が寄せてくれる予定になっております。「乞うご期待」です。

付記：『現象と秩序』は、国立国会図書館雑誌記事索引の対象誌に選定されています。CiNii等でも「論文単位」「論文著者単位」で検索が可能となっております。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2015年度）

編集委員

檜田美雄（神戸市看護大学）

中塚朋子（就実大学）

堀田裕子（愛知学泉大学）

編集幹事

松下晶季（神戸市外国語大学）

坂根杏奈（神戸市外国語大学）

編集協力

村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第4号

2016年 3月31日発行

発行所 〒651-2103

神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 檜田研究室 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074（ダイヤルイン）

e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>